

インターネットと看護

滋賀医科大学医学部情報センター

ワシントン大学ヒューマンインタフェース研究所

永田 啓

インターネットは、ネットワーク自体の研究用としてスタートし、コンピュータサイエンスの研究者や一般の研究者に長年使われてきました。日本でも、大学や研究所のネットワークをつなぐ実験は早くから始まっていましたが、ほとんどの大学にインターネットがゆきわたったのは、ほんのここ2年ほどのことです。

インターネットは大学や研究所のそれぞれのネットワーク（これをLANすなわちローカルエリアネットワークといいます）を順番に接続して、データのやりとりをしようとするもので、どこかに中心となる大きなコンピュータがあるわけではありません。LANが数珠つなぎにつながって行って、それがアメリカやヨーロッパなど世界中につながっていているわけです。ちょうど神経細胞が腕をのばして次々とつながっているようなイメージです。

インターネットでは、情報をわたすときに、パケットリレーをやります。たとえば、ワシントン大

学から広島大学に電子メールを送ると、ワシントン大学からとなりの大学のLANにこの電子メールをわたします。となりの大学は宛先をみて、それが自分のところのものでないと判断し、次に渡します。このようにして、順番にLANからLANへ電子メールは渡されて、長い長い旅をして、最後に広島大学にたどりつきます。でも、これは、コンピュータの世界の事なので、実際にワシントン大学から広島大学に手紙が届くまでは、数分しかかかりません。

インターネットは去年から突然、一般の方にも流行りだし、研究用のネットワークからごく普通の人が使えるネットワークに変貌しました。まだまだ、過渡期にあるインターネットですが、今回の講演では、現時点でのインターネットは、どんな感じのもので、世界では看護でどのようにインターネットが使われているのかを、できるだけ具体例をあげて紹介したいと思います。